

大阪大学図書館報

Vol.34 No.1 June 2000 (平成12年) 通巻136号

目次

- 懷徳堂と電子図書館
- 本館新館オープンについて
- 教官著作寄贈図書
- お知らせ
 - ・図書館の組織変更
 - ・本館・生命科学分館で日曜開館の試行
 - ・10th & 11th CI on CD の公開
- 会議・日誌

懷徳堂と電子図書館

湯 浅 邦 弘

「読書」の変容

中国宋代の司馬光（1019～86）は、王安石の新法に反対した政治家として、また、『資治通鑑』を著した学者として知られている。その司馬光が、ある時、「読書」について次のような苦言を呈した。

最近の学者は、巻頭から書を読み始めて巻末まで読み進めるものが少ない。中には、本の途中から、あるいは巻末から随意に読み始めるものさえいる、と。

こうした司馬光の嘆きは、当時の読書をとりにくく環境の変化と深い関わりがあった。

中国で紙が発明されて以来、文字は、それま

での竹簡や帛（絹）にかわって紙に筆写されるようになった。

さらに、唐の時代の終わりに木版印刷が発明され、それが宋代に入って普及してくると、書物の形態は一変した。それまでのいわゆる卷子本は、折本を経て、綴本（冊子体）へと姿を変え、手書き写本による伝承から大量印刷による流布へと、時代は大きく転換したのである。

冊子体は、携帯性・保存性・耐久性にすぐれ、また、現在も原稿用紙にその名残をとどめる。版心（版面の中心）には、葉数（頁数）が記された。卷子本では、読書の位置をおおよそその紙幅でアナログ的に推測するほかなかったのに対

し、冊子では、葉数・行数によって現在位置をデジタルに確認できる。また、これに関連して、全体の目次や小見出し、文字の大小などの工夫も加えられていった。

こうしたテキスト上の配慮は、文章の流れに沿った読書にとっても便利であり、また、部分的な読書や文章の流れを無視したつまみ食いの読書、資料検索的な読書などをも容易にした。

またこれは、単に製紙技術や印刷技術が発達したというに止まらず、新たな読書に対応する必然的な工夫であったとも言える。

木版印刷の普及とともに、巻頭から順々に、一字一句を味わいながら熟読精読するという、古来の正統的な読書とは異なる読書の姿が、現実によく見られたのである。司馬光の言は、こうした読書の変容に対する保守的立場からの嘆きであった。

「電子図書館化」構想

しかし、伝統的な読書観が変化してしまったというのは、はたして悲しむべきことだったのか。確かに、司馬光のような正統的読書を尊重する立場からすれば、最近の読書人は不謹慎であるということになろう。しかし、その反面、それは、読書人層の爆発的な拡大をも意味している。もはや、読書は一部の特権的な知識人だけのものではない。読書人の広がりにより豊かな読書の姿をもたらし、テキストの形をより良く変えていったのである。

それから、約千年が経とうとしている。「読書」と「テキスト」は、また大きな変容の時代を迎えた。

平成11年4月、本学附属図書館に、「研究開発室」が創設された。これは、附属図書館長直属の室員数名によって構成され、図書館の将来像について研究開発を行うという組織である。その課題の一つに掲げられたのが、図書資料を電子情報化するという、いわゆる「電子図書館化」構想である。

これまでの図書館は、大きな悩みを抱えてきた。多くの人に広く情報を提供したい。しかし、資料はできるだけ良好に保存しておきたい、という矛盾である。その結果、大学図書館の場合は、どちらかと言えば、資料保存の方に重点が置かれ、資料公開という点については、あまり積極的ではなかったといえる。特に、大学関係者以外にとって、大学図書館の敷居は高かった。

そこで、この二律背反を解消する切り札として登場したのが、「電子図書館化」構想である。そして、その目玉として現在注目されているのが、^{かいとくどう}懷徳堂文庫の貴重書である。

室員の中で、唯一文学研究科所属の教官である筆者が最も深く関わっているのも、この懷徳堂の電子化事業である。

懷徳堂と大阪大学

享保9年(1724)、大坂の地に誕生した学問所「懷徳堂」は、^{ごとうし}五同志と呼ばれる大坂の豪商たちによって運営された。二年後に江戸幕府から官許を得た後も、江戸幕府の学問所^{しやうへいこう}昌平黌や諸藩の藩校、あるいは高名な儒者の主宰する私塾とは異なって、儒教的な倫理道德を基盤にしながらも、自由で批判精神に満ちた教育と研究を展開していった。

しかし、幕末・明治維新の政治的経済的混乱により、明治2年に閉校。明治の末年から大正にかけて、^{にしむらてんしゅう}西村天因(朝日新聞記者、のち京大教授)の奔走により学舎は再建されたものの、昭和20年の大阪大空襲によりそれも焼失した。

ところが、書庫に収められていた書籍は、奇跡的に災禍を免れ、戦後、阪大に文学部が創設された際、一括して阪大に寄贈され、現在、これらの貴重な資料約5万点が、本学附属図書館に収蔵されている。

こうした経緯から、懷徳堂は、二度の歴史の断絶を乗り越えて、阪大の一つの源流と位置づけられているのである。

懷徳堂の電子化

平成13年の5月に、大阪大学は創立70周年を迎える。その記念事業の一環として、現在、懷徳堂と適塾をマルチメディア技術によって顕彰しようという計画が進められている。

懷徳堂については、江戸時代の懷徳堂学舎をバーチャル化して再現し、3D空間での講義体験ができるようにすることと、懷徳堂関係資料を電子図書館化することとが具体化しつつある。これが実現すれば、研究者だけではなく、多くの人に懷徳堂を「体験」してもらうことができる。

バーチャル空間に身を置くことにより、当時、身分の上下ではなく、学問の進度に応じて席次が定められていたという懷徳堂の教育システムを体感できよう。また、学費は一律ではなく、貧しい者は紙一折、筆一対の現物納入でもよかったというその経営方針も理解できよう。

一方、電子図書館では、ごいらんしゅう ひぶつへん五井蘭洲の『非物篇』やなか いちくざん ひちよう中井竹山の『非徴』を、竹山自筆本の画像とその解題によって閲覧することにより、江戸の高名な儒者おぎゆうそ らい荻生徂徠を徹底的に批判した懷徳堂学派の合理的精神、権威に屈しない批判精神が浮かび上がってくるであろう。また、中井履軒の、漢文で記された膨大な経学研究書と流麗なか しよこものがたり和文で記された『華胥国物語』とを対照してみれば、経学研究における履軒の優れた見識と、はるか彼方の世界に心を遊ばせていた履軒の心情とが同時に伝わってくるかもしれない。

あるいはまた、バーチャル空間とデータベースを活用することにより、懷徳堂では、商人を受講生としながらも、決してビジネスの話をしていたのではなく、その商業活動の根幹を支えるべき「人の道」、特に「孝」の精神が強調されていたことも明らかにされるであろう。また、伝統的な儒教の考え方では、厳しく対立するとされていた「義（正義）」と「利（利益）」とが、懷徳堂では、矛盾しないものとして柔軟に教えられていたことも分かるであろう。

新たな読書体験

もとよりこうした体験は、宋代の司馬光に言わせれば、「正しい」読書体験ではないかもしれない。しかし、この試みは、新たな読者層、新たな懷徳堂ファンの獲得に充分寄与するであろう。懷徳堂という名前さえ知らず、阪大図書館とは一生無縁のままに終わったかもしれぬ多くの人々が、懷徳堂を身近に体験しうるからである。こうした読書体験は、従来の「正しい」読書からは得られなかった驚きと発見をもたらすに違いない。

それにしても、この研究開発室。「室」と言いながら、専用の部屋はどこにもなく、予算も皆無である。もっとも、快適なスペースと潤沢な予算を持つ巨大な組織だけが、すぐれた成果をあげるとは限らない。

部屋も予算もない「研究開発室」で、「読書」の歴史を変えていこうとする壮大なプロジェクトが進められている。

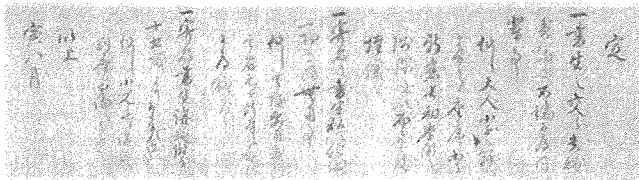
【附記】

創立70周年記念に関わる適塾・懷徳堂の顕彰事業は、学内のマルチメディアコンテンツ実行委員会によって進められています。なお、懷徳堂資料については、本学附属図書館のホームページ (<http://www.library.osaka-u.ac.jp/>) に画像の一部が提供されています。また、懷徳堂資料の内、特に漢籍資料に関する研究情報については、本学文学研究科中国哲学研究室のホームページ (<http://bun165.let.osaka-u.ac.jp>) を御参照下さい。



懷徳堂幅

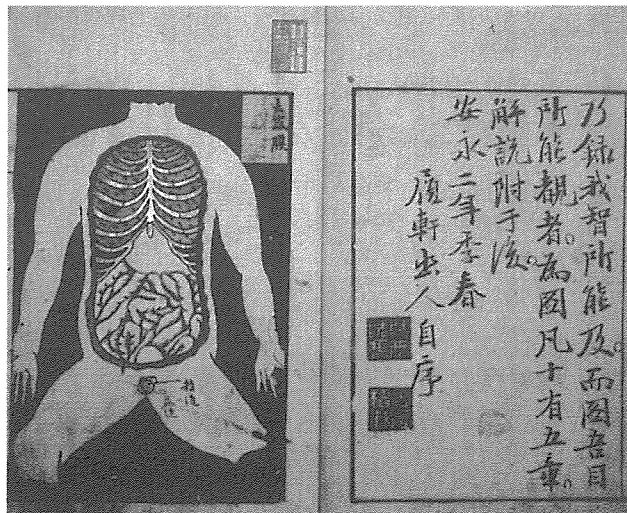
懷徳堂初代学主三宅石庵筆。「懷徳」とは中国の古典に基づく語で、常に「徳を懷う」という意味。



宝暦8年(1758) 定

懷徳堂四代目学主中井竹山筆。懷徳堂教育のあり方を示す代表的な学則で学寮に掲示されていた。

学生間の交わりは、貴賤貧富を問わず同輩とすべきこと、席次は、新旧、長幼、学問の進度などを目安として互いに譲り合うこと、などを規定している。

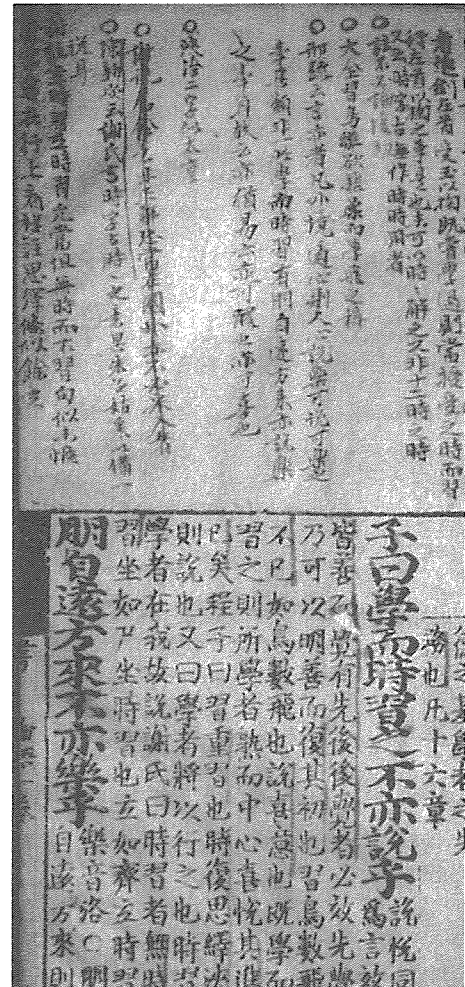


えっそろうひつ 越俎弄筆

中井履軒による人体解剖図および解説。履軒の実証的精神は、漢学という枠をはるかに越え、医学にまで及んだ。本書の刊行は安永2年(1773)3月。それは、前野良沢・杉田玄白らによる日本初の翻訳解剖書『解体新書』が刊行される前年のことであった。

この頁の図版は、すべて図書館ホームページの「電子展示で見る懷徳堂」で公開されています。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/tenji/kaitokudo/kaitoku.htm>



ろんごちょうだい 論語雕題

中井履軒自筆書入の『論語』注釈書。欄外に記された細字の注釈が、その知的格闘の跡を示している。

本館新館のオープンについて

昨年2月より建築工事を進めていました本館新館は、本年3月に竣工しました。

新館と旧館とを合わせた総面積は約19,000㎡となり、面積では全国の大学図書館の中でも10位以内に入る大規模図書館となります。この建物に合わせて内容も充実するように、現在開館に向けて準備を進めているところです。新館のオープンは9月1日に予定されています。

なお、新館開館に向けた館内整備、資料の移動、諸設備搬入・設置等の作業のため、本館は7月16日から8月31日まで臨時休館することになっています。この間、利用者の皆さんにはご迷惑をおかけしますが、ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

臨時休館の詳細については、以下のWWWページを参照して下さい。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/news/kyukan2000.htm>

●利用にあたって

(1) 建物の呼び方

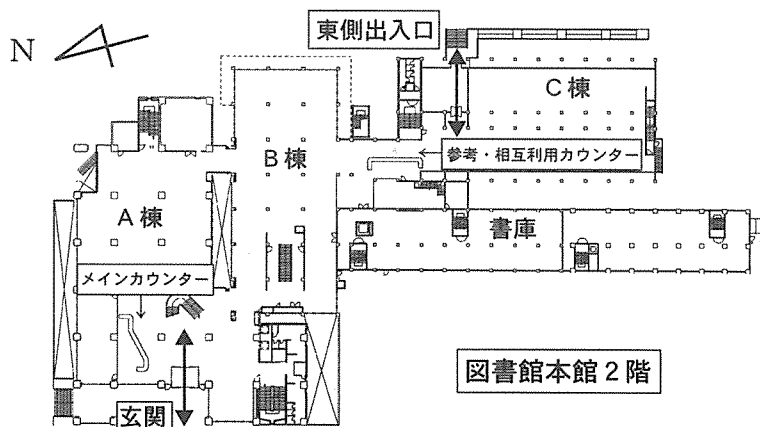
新館の建築に伴い、図書館の階層が下から1階～6階となることはすでにお知らせしましたが、建物について、新館をA棟、旧館の改修部分（北側）をB棟、旧館南側部分をC棟と呼ぶこととして、各種利用案内でもすべてこの呼称を使うことになりました。

(2) 図書館への入館・退館

図書館への入口は二つになります。A棟（新館）2階西側の玄関の他、C棟2階の現在の玄関が東側出入口として引き続き利用できます。ただし、東側出入口は17時で閉じられますので、それ以後は新館玄関しか使えません。入館方法は両方の出入口とも、現在と同じです。図書館の発行する従来の利用者票を入館ゲートの読み取り機に差し込むと、ゲートのロックが解除されます。利用者票を携帯していない方、学外の方は、A棟の玄関を利用していただきます。

(3) サービスカウンター

図書館の二つの入口を入ったところに、それぞれサービスカウンターがあります。A棟（新館）のカウンターがメインカウンター、C棟のカウンターが参考・相互利用カウンターです。図書の貸出・返却は、A棟のメインカウンターで受け付けます。貸出・返却方法は従来と同じです。参考・相互利用カウンターでは、参考業務、相互利用サービス、文献複写の受付を行います。



その他、利用の詳細については、利用案内・ホームページ等でお知らせする予定です。

■■■■■ 教官著作寄贈図書 (2000/Feb-June) ■■■■■

本 館	
村橋 俊一 (基礎工学部、教授)	Transition metal catalysed reactions / edited by Shun-ichi Murahashi and Stephen G. Davies Oxford : Blackwell Science, 1999 (基礎工学部図書室にも寄贈)
梅溪 昇 (名誉教授)	軍人勅諭成立史 / 梅溪昇著 東京 : 青史出版, 2000
山田 勇三 (言語文化部、助教授)	Writing under influences : a study of Christopher Marlowe / Yuzo Yamada Tokyo : Eihosha, 2000
江川 温 (文学部、教授) 杉本 淑彦 (文学部、助教授)	フランス史からの問い / 服部春彦, 谷川稔編 東京 : 山川出版社, 2000
林 紘三郎 (基礎工学部、教授)	バイオメカニクス / 林紘三郎著 東京 : コロナ社, 2000
文学部英米文学研究室	藤井治彦先生退官記念論文集 / 藤井治彦先生退官記念論文集刊行会編 東京 : 英宝社, 2000
江川 温 (文学部、教授)	西洋中世史研究入門 / 江川温著 名古屋 : 名古屋大学出版会, 2000
浅田 孝幸 (経済学部、教授)	戦略的プランニング・コントロール : 21世紀の管理会計への課題と挑戦 / 浅田孝幸代表編集 東京 : 中央経済社, 1999
森信 茂樹 (法学部、教授)	日本の消費税 : 導入・改正の経緯と重要資料 / 森信茂樹著 大阪 : 納税協会連合会 大阪 : 清文社 (発売), 2000
	大学教授物語 : ニューアカデミズムの創造を / 森信茂樹著 東京 : 時評社, 2000
微生物病研究所図書室	
本田 武司 (微生物病研究所、教授)	あなたを狙う感染症 / 本田武司, 飯島義雄著 東京 : 小学館, 2000
	病原菌はヒトより勤勉で賢い : 敵視でなく、共生の方法を / 本田武司著 東京 : 三五館, 2000
蛋白質研究所図書室	
松浦 良樹 (蛋白質研究所、助教授)	化学英語の活用辞典 : 化学の論文を英語で書くための / 香月裕彦編集代表 第2版机上版 京都 : 化学同人, 2000

■■■■■ お知らせ ■■■■■

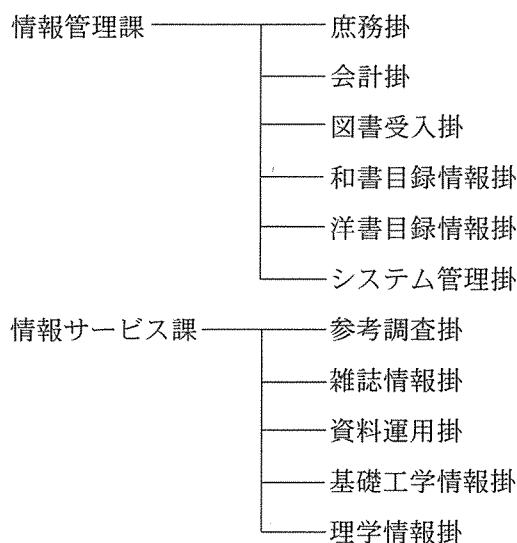
○図書館の組織変更

図書館では4月に事務組織の再編を行いました。新館完成にともない理学部、基礎工学部図書室を本館に統合することになっていますが、この業務統合に対応してサービス部門が大幅に再編されました。また、サイバーメディアセン

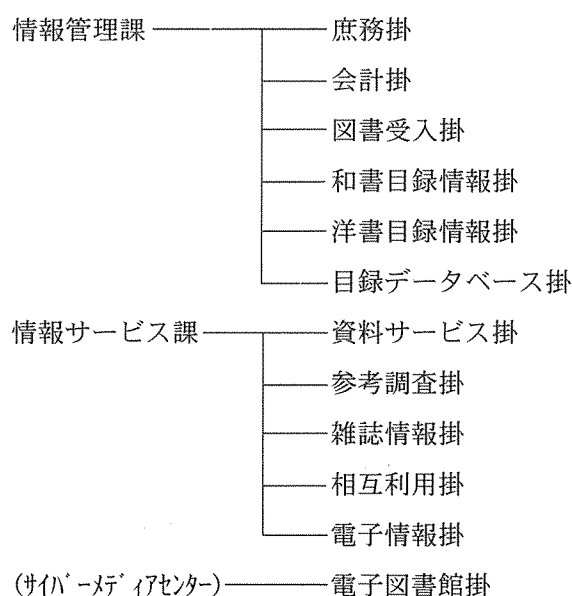
ターの発足により、図書館の電算業務の一部が同センターに移行することになり、管理部門の組織編成も変更されました。

図書館の新旧組織は、次の図のとおりとなります。

(旧)



(新)



○本館・生命科学分館で日曜開館の試行

この4月より、かねてから要望の多かった図書館の日曜開館を本館と生命科学分館で試行的に開始しました。

開館時間は本館が 10:00 ~ 17:00、生命科学分館が 12:00 ~ 17:00 です。また、サービス内容は以下のとおりです。

本館：館内閲覧・貸出・OPAC検索

生命科学分館：館内閲覧・OPAC検索、
CD-ROM 検索

○10th & 11th CI on CD の公開

附属図書館データベース検索システムで、Chemical Abstracts の抄録つき累積版 (Collective Index)、『CI on CD』の10th(1977-81)、11th (1982-86)が利用できるようになりました。

すでに提供している CA on CD (カレント版)、12-13th CI on CD とあわせて、Chemical Abstracts の 1977 年以降のデータがすべてオンラインで検索可能となりました。

このデータベースは図書館内の検索用パソコンから利用できますが、研究室からデータベース検索システムをご利用するには申請が必要です。詳しくは以下を参照してください。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/others/gakujutu.htm>

■■■■ 会 議 ■■■■

体系検討小委員会

2. 21 (月) 10:05 ~ 11:45

1. 附属図書館 (本館) 事務組織の再編成及び事務部事務分掌規程の一部改正について、協議の結果、承認された。
2. 学生用図書の充実について、各委員の意見を伺った。

豊中地区運営委員会

3. 15 (水) 9:30 ~ 9:55

1. 次期豊中地区運営委員会委員長に、経済学研究科杉原教授が選出された。

図書館委員会

3. 15 (水) 10:00 ~ 12:00

1. 平成 12 年度事業費予算要求について、審議し原案どおり承認された。
2. 平成 12 年度データベース検索システムの料金について、審議し原案どおり承認された。
3. 日曜開館について、審議し原案どおり承認された。
4. 附属図書館（本館）事務組織の再編成及び事務部事務分掌規程の一部改正について、2. 21 以降の改正案を審議し、原案どおり承認された。
5. 平成 13 年度新規概算要求について、審議し原案どおり承認された。
6. 研究開発室室員の選考について、審議し原案どおり承認された。

分館長会議

4. 10 (月) 10:00 ~ 11:30

以下の各議題について検討した。

1. 各種委員会委員の選出。
2. 総長裁量経費申請。
3. 学生図書の充実。

■■■■ 日 誌 ■■■■

H 12. 1. 6	サイバーメディアセンター設置準備委員会専門委員会	(大型計算機センター)
1. 14	国立七大学図書館長懇談会	(東京大学)
1. 20	国立大学附属図書館事務部長会議	(群馬大学)
1. 27	課金委員会	(学術情報センター)
2. 10	サイバーメディアセンター設置準備委員会専門委員会	(大型計算機センター)
3. 1	国立大学図書館協議会	(東京工業大学)
3. 22	大阪大学図書館職員研修会	(生命科学分館)
5. 18 ~ 19	第 71 回日本医学図書館協会総会	(秋田ビューホテル)
5. 23	国立大学附属図書館事務部課長会議	(東京医科歯科大学)
5. 24	国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会	(東京大学)
	国立大学図書館協議会常務理事会	(東京大学)
5. 25	図書館電子化システム特別委員会	(東京大学)
	国立大学図書館協議会理事会	(東京大学)
5. 26	国大図協と国立情報学研究所との業務連絡会	(国立情報学研究所)